

# 音楽の神様エルメート・パスコアルを訪ねて

## はじめに

ジャズ界の帝王マイルス・デイヴィスをして“クレイジー、アルビーノ！”と驚嘆させ、“次に生まれ変わる時は彼のような音楽がしたい”とまでいわしめたブラジル音楽界の鬼才エルメート・パスコアル。縁あって私は彼と親交があり（詳しくは2006年に発売されたエルメート・パスコアルとその妻アリーニ・モレーナのアルバム“Chimarrão com Rapadura”の日本盤ライナーノーツを参照ください）、2005年から毎年、年末から正月にかけてエルメート夫妻に会うためにブラジルを訪ねている。2005年に渡伯の際は、夫妻の住むクリチーバの町を中心に何日か滞在し、2006年末には、夫妻とともにブラジルが誇る世界3大の滝の一つであるイグアスの滝を巡る5日間の旅を敢行した。これらの旅は、いちエルメートファンの私にとっては生涯忘れ得ぬ貴重な体験となった。加えて、そうした旅の中で、まだ世間ではあまり知れ渡っていない昔の貴重な体験談を数多く氏から直接うかがうことができた。その時の話を少しでも多くのエルメートファンやジャズファンの方々に知ってもらいたいとの一念で、この場を借りて紹介したいと思う。

## 1. アントニオ・カルロス・ジョビンとの出会い

知る人ぞ知る存在、鬼才中の鬼才としてジャズ界に留まらず、多くのアーティストからリスペクトされるエルメート・パスコアルと、ボサノヴァの創始者の一人としてつとに知られる世界的な作曲家のアントニオ・カルロス・ジョビンこと、通称トム・ジョビン。ソフトでソフィステケートされたジョビンの音楽に対して、プリミティブであるが、ときに難解で、様々な楽器から音を出すなど鬼才ぶりがあますところなく発揮されているエルメートの音楽では、白と黒、水と油とたとえるのは言い過ぎかもしれないが、きわめて対称的である。けれども、両者ともブラジルを愛し、音楽で祖国ブラジルを表現する世界的な作曲家であることでは共通している。そんな2人の巨人の接点を追うと、有名なところでは、1970年に発表されたジョビ

ンの名作 Tide (潮流) の Tema Jazz という曲にエルメートがフルートで1曲参加ぐらいで、以外と少ない。(エルメートのここでのフルートソロは、曲の色彩を完全に変えてしまうほどの鬼気迫る存在感がある。)

二人の本格的な出会いは1970年代初頭のアメリカ。エルメートのアメリカ滞在中のある時、ずっとアメリカで音楽活動をおこなってきたジョービンが、力なく相談してきたことがあったと言う。“自分の音楽(ボサノヴァ)に疲れている。私はもっと君が Quarteto Novo (1960年代中期に歌手ジェラルド・バンドレーのバックで演奏するために結成された伝説的なカルテット。メンバーに、エルメート・パスコアル、アイルト・モレイラ、エラルド・ド・モンチ、テオ・ヂ・バホスがいた。1968年のアイルト・モレイラの渡米で事実上解散したと言われている)でやってきたような音楽がしたいんだ。”ボサノヴァの世界的なヒット、アメリカでの成功。皮肉なことに、そこには自分が世に出したボサノヴァによって逆に束縛され、自分の音楽の進むべき道に行き詰まるジョービンがいた。そんなジョービンにエルメートは言ったそうだ。“ブラジルに帰りなさい。そしてもっとブラジルの音楽をきなさい。”そう言われたジョービンは少し安心したような気持ちになったそうだ。たしかにその後、ジョービンはブラジルの自然などをモチーフにした、ボサノヴァとは異なる作品を立て続けに発表しているし、1973年発表のアルバム Matita Pelêx の中から名曲 Águas de Março (3月の水)が生まれたのも、エルメートのアドバイスがあったせいなのかもしれない。エルメート・パスコアルとトム・ジョービン。二人の巨匠のアメリカ時代の出会いを物語る1枚の写真が今もエルメート宅には大切に残されている。

## 2. マイルス・デイヴィスとアルバム Live Evil

エルメート・パスコアルを知るきっかけとなった作品として、マイルス・デイヴィスの1970年の名作 Live Evil を挙げる人は少なくない。この作品でエルメートは、Little Church, Nem Um Talvez の2曲を提供し、キーボード、ドラム、歌、口笛などで3曲に参加している。エルメート提供の2曲に関しては、クレジットには当初マイルス作とされたいたために、これ

らの2曲についてはなにかと話題になることも多いが、正真正銘エルメート・パスコアルの作品である。エルメートは、先に渡米していたブラジル時代からの盟友アイルト・モレイラの紹介でマイルスと知り合い、この作品に参加することとなったようだ。

エルメートの話によると、録音に先駆けて1度マイルスが自宅にエルメートを招待してくれたそうだ。そこでマイルスはエルメートに何曲か演奏するように頼んだ。エルメートはその場にあったギターで自作曲を10数曲演奏した。マイルスはそれら全てをいたく気に入り、全て録音したいと申し出たそうだが、エルメートはマイルスのアルバムだからという理由で2曲のみの提供に留まったそうだ。それらがかの有名な Little Church と Nem Um Talvez であったのである。エルメートとマイルスの共演している映像がもし存在するのであれば、ぜひとも見てみたいものである。

### 3. 惜しまれつつこの世を去った偉大な先輩ミュージシャン、シブーカ

2006年12月。76歳で惜しくもこの世を去ることとなったブラジルが誇るマルチミュージシャン、シブーカ。彼は生前、エルメートのことを「ブラジルが誇る現代のベートーベン」と絶賛していたという。同じアルビーノ（色素欠乏症）で見た目も瓜2つと言われるシブーカとエルメートは共にブラジル北東部の出身。二人にエルメートの兄の故ジョゼー・ネットを加えた三人で、過去に1度だけラジオで演奏する機会があったらしい。1950年代ごろの話であろう。シブーカはエルメートより6歳年上で、この頃にはもう楽器の演奏には卓越していて、既にブラジルのアコーディオン奏者とも言われていたそうで、演奏はシブーカ中心のものであったようだ。3人がそろってアルビーノであったために、ラジオ曲の社長が“O Mundo Pegando Fogo（火事にみまわれた世界）”と称したと言われる。惜しいことにたった一度だけのトリオのコラボレーションで、録音等は残っていない。その後、シブーカはリオへ渡り、そして長期間のフランス滞在へと入った。二人がその後再会し、旧交を温めたのは1970年代のアメリカにおいてのことであった。そこで共にアイルト・モレイラの録音に参加し、すばらしい演奏を聞かせてくれた。偉大な先輩ミュージシャンの死はエルメートにとってもすこぶる

ショックなことであった。

余談ではあるが、どれだけエルメートとシブーカが瓜二つだったのかを表す興味深い逸話がある。1961年にリオからサンパウロに拠点を移したエルメートが道を歩いていると、“シブーカさん！元気ですか？今ベーシストがいなくて困っているんだけど誰か知りませんか？”と声をかけられたそう。それだけエルメートはシブーカに似ていたのだろう。そのときのエルメートは正直に“残念ながら私はシブーカではありません。シブーカの友人です。けれど私はベーシストです。なんなら私が代わりに演奏しましょうか？”と返事をしたそう。もちろん、エルメートはベースを演奏したことがなかったが、そのまれなる才能とたゆまぬ努力ですぐにベースをマスターし、その後の仕事をいくつか手中にした話はつとに知られる。

驚くなかれ、私がエルメートを訪ねた際、道を一緒に歩いていると時々“シブーカさんですか？”といまだにたずねられていたことである。エルメートはいつも笑顔で“いえいえ、私はエルメート・パスコアルですよ”と笑顔で返すか、“天国からシブーカが帰ってきました”と感じよく返している姿が大変印象的だった。

#### 4. エルメートが絶賛する謎のアジア系ピアニスト、テディー・リー (!?)

あらゆる楽器を演奏する奇想天外なミュージシャンとしても知られるエルメート・パスコアルであるが、私が尊敬する最大の理由の一つは、エルメートが音楽に対して少年のごとく純粋で、一つ一つの楽器の演奏に関しても天才的な音を出し、聞く者を魅了する力を持っているということである。特に私はエルメートのピアノが大好きだ。興味のある人は彼の1989年のピアノソロ作 *Por diferentes caminhos* を聴いていただきたい。ピアニストの板橋文夫さんが、著書ジャンボ・オブリガードの中で、エルメート・パスコアルは世界で1, 2をあらそうピアニストで作曲家だと述べていることからエルメートのピアノのすばらしさをご想像いただけると思う。

そんなエルメートが、過去に忘れられないピアニストがいたという。そのピアニストの名前はテディー・リー。どうやらアジア系のアーティストのようで、エルメートはおそらく日本人

だった言っていたが、名前からすると日本人ではないような気がする。彼との出会いは1970年代のアメリカ。当時テディーは20歳前後の若手ピアニストで、周囲のアメリカ人のピアニストと比べて群を抜いていたそう。ちょうどその頃、アイルト・モレイラが共演するピアニストを探していて、エルメートはテディーを薦めたそうだが、残念ながらコラボレーションには到らなかったそうである。今もエルメートはテディーの演奏を思い出すことがあるという。現に、私にテディーの話をしてくれたのも1度や2度ではなかった。“今テディーはどうしているのだろうか？”エルメートはそう呟いていた。もし、テディー・リーの消息を知る方がおられたらぜひご一報いただきたい。

## 5 ジャズピアニスト、デューク・ピアソンとの親交

デューク・ピアソンとエルメートのつながりは、ブルーノートレーベルから1970年に出されたデュークのアルバム“IT COULD ONLY HAPPEN WITH YOU”でエルメートがフルート、ギター、ベースで参加していることから一般的に知られていることと思う。ちょうどこの作品が出される前のデュークとの出会いをエルメートが話してくれた。

渡米して間もないある日、アイルトがエルメートをデュークの家連れていってくれた。アイルトは先にアメリカに来ておりすでに英語は堪能であったが、エルメートは一般的なブラジル人同様、英語は一切できなかった。そんなエルメートを一人残してアイルトはなぜか突然帰ってしまったそう。言葉の通じ合わない二人は最初テーブルに向かいあってただひたすら笑顔でコミュニケーションをはかっていたそう。そんな沈黙も限界が来て、二人でピアノを連弾したり、楽器を演奏することで二人の気持ちが一気に打ち解け、1つになった。このことが、あの作品“IT COULD ONLY HAPPEN WITH YOU”につながったのであろう。置いてけぼりにされたエルメートにとっては最初は迷惑な話だったかもしれないが、二人の友情、作品の誕生を考えるとアイルト・モレイラの功績も忘れることはできない。

2007年3月4日